富山県農山村振興対策委員会　会議概要

１　日　　時　　平成２６年５月２１日（水）１３：３０～１５：００
２　場　　所　　サンシップとやま研修室６０１
３　出席委員　　上野和枝、川合声一、小林由紀子、酒井富夫、瀧本裕士、中谷信一、
　　長谷川由美、前田雅美、水野洋子（五十音順、敬称略）

４　議　　事

中山間地域等直接支払制度の最終評価（案）について

＜質疑、意見交換＞

（委員）八尾町桐谷集落では、２期、３期対策は取り組んでおらず、このような中山間地域の実状に即した対応をしてもらいたいと前回(２月の委員会)意見を申しあげたところ、その後、県から、中山間直払制度の概要の説明を受け、より高齢化が進む集落として桐谷集落で取り組むことが可能とわかり、桐谷集落の方と相談し、多面的機能支払も含めて議論を重ねた。

意見が大きく二つに分かれた。

地元の農家さんは、大方もうやめたい、５年続かないというという意見が出た一方で、外から来てくれる人のサポートもあるのではないかと言ってくれる人もいる。だけど、５年続けてくれる保証は無く、もし外から来ている人がいなくなったら集落が責任を持って交付金を返す事態になるかもしれないという方がいる。

協定期間を短くすることは、取組みしやすくなる。チャレンジ支援事業のような、連携による加算措置もいいものだと思う。集落外の連携も長く続けると、集落の方には、「疲れてきた、もう勘弁してよ」という思いの人もいる。なかなか調整にエネルギーが必要になってくる。

要望に反映してもらいたいことは、外から来る人の力をもっと上手に使って、高齢の方も安心して、地域の方と手をつないで若い方の就農を促進するための柔軟な制度があればよいと思います。

例えば、若い方に安心して中山間地域で新規就農できるように（桐谷集落で）取り組んでいるのですが、新規就農について、平野部で大規模な営農組織で先進的な研修を受けることが条件でないと新規就農の支援が受けられないことがわかったのですが、中山間地域の特有の農業を学び、新規就農を受け入れる余地が無いと（中山間地域の集落の）世代交代が進まないと切実に感じる。

（委員長）３年先なら見通せる、助かるということですね。

（委員）そういうことです。

（委員長）ただ、制度としては短ければいいというものではないと私は考えますが、一方で地元の方から見ると短いほうがいいということも切実な意見としてわかります。他にご意見はいかがでしょうか？

（委員）南砺市立野原で社員３名が、その地元の集落から依頼があり、アスパラの生産に取り組んで５年経った。やってみますと、地域からは「もっとやってくれないか」との声が増えてきている。生姜、ニンニク、唐辛子が米菓の副材料として使えることから取組を進めてきた。会社周辺に関心がなかった、目を向けてなかったけれど、周辺の地域の方とコミュニケーションができることによって、障がい者の就労支援の取組をやりたいという方がいるという情報が入ってくる。サツマイモの芋菓子を企業連携で作っている。食品加工業の皆さんが関心を持って動いてくれれば、と思うが、取っ掛かりが無い。
　これから、どう続けていくか、企業連携をどう進めていくか、さらに拡大するかどうか躊躇している状況。現在は試行錯誤の状態である。
　営農指導の方によく指導してもらって、いいものができるようになった。すぐ売れるようになった。芋菓子の研究中でもあり、農地を増やすこともできるのではないかと考えているが、今後どう計画していくか、知恵を借りたいとも思っている。

（委員）農業は結果が出るまで時間がかかると感じている。期間の短縮は慎重に考えたほうがいいと考えている。
　県では、「中山間地域チャレンジ支援事業」をどう評価しているのか？

（事務局）平成２３年度から実施しており、４年目となり、これまで２４地区で実施されています。特産品の開発などの取組が多くあり、地域の方の収益向上に結びつく事例もある。特に担い手（連携先）を外（集落外）に求めるのがポイントであり、そのきっかけづくりや連携を深める取組として有効であると考えている。

（委員長）例年２月にチャレンジ支援事業の助成を受ける団体等の事例発表があり、取組のある地域が元気になりつつあると感じている。

（委員）氷見市の実施率が７７％と低いのはなぜか？
（事務局）より高齢化が進む地域で担い手不足が進んでいる。担い手不足が、県内でも氷見市で顕著に現われている状況である。

（委員長）協定を結ぶのも、ある程度（集落に）力がないとできない。５年後はとてもじゃないけど見通せない集落がある一方で、５年間しっかり営農を続けるというのが条件の制度であるので、本当に条件が厳しい集落が救えないということになる。
　このような集落が救えるように要望の中に入れないといけない。より条件不利（超高齢化）が進んでいる集落は、特別に考えるべき。

（委員）協定期間の３年コース、５年コースを集落が選択することができるのもいいのでは。

（委員）収益向上に取り組む事例については、今後に繋がるすばらしい成果だと思う。
　大学との連携について、（実現すれば）大学側としては、ありがたいメニューである。中山間地域の振興をしていくためには、外からの視点が必要であると考えている。学生がイベントのみではなく、継続して関わることが大事で、学生の民泊など親子関係のような絆、交流を深めていくような教育プログラムが必要なのかなと思いました。
　例えば、条件不利な集落に自分が住めるかというと、学校も病院も遠く、住むのは難しい。住む以外の関わり方を考えていくべき。農家の方は、水路のことや機械関係のことなど、いろんな生活の知恵を持っている。学生がそこで学ばせてもらうことで関わっていくことも必要であり、上手くいくと、交流を深めていく中で生活の場と求めていくこともありえるのではないか。

（委員）より条件の厳しい集落は、この制度で救うことができないところがある。平、上平、利賀の例では、田が大半であり、農業公社が担い手となり農地を維持しているが、傾斜のあるところでは、住宅の廻りに畑となっているところも多く、支援に（田畑の）差をつけないで欲しい。ほ場整備できたところは田となっているが、未整備のところは畑になっている。
　大学生や企業との連携した活動を支援する制度、優遇処置があれば、より参加しやすいと思う。
　協定期間の短縮について、これまで１５年間経過し、例えば当初６０歳だった人が７５歳となり、高齢化している中で、３年程度の短縮については、現実として、地元でこの話（集落協定の継続）を進めようとすると、３年程度ならわかるけど、５年間はきついという気持ちは良くわかる。一方で、国、県のほうから見ると３年はいかがなものかという意見もあると思う。
　実際、現地の方を見ていただくと、理解していただけると思う。

（委員長）学生は実態を知らない。もっとＰＲをすべきである。中山間地域の深刻な現状認識と対策について理解してもらうところから始めるべき。

（委員）慶応大学の学生が春・夏まつりに来てくれる。夜行バスで東京から富山駅に早朝に到着し、それから利賀へ向かう。アクセスが大変不便で大変である。

（委員長）他から来る人のサポート体制について、意見がありましたので、要望に入れるよう検討して頂きたい。

　これまでの意見を総括いたしますと、

　<u>学生も含めて、外から来る人のサポート体制</u>、また、特に若い人の（中山間地域の農業

の担い手となってもらうための）就農支援や研修制度の充実について意見がありました。

チャレンジ支援事業のような集落と企業等との連携の取組への支援の必要性について、川合さんより、連携後の継続した取組についての実情も含めて、意見が出されました。

より条件不利（超条件不利）な集落に対する支援、中山間直払制度だけで充分かと言われるとそうではないという意見が出されました。これに対する何らかの支援が必要ではないかという意見がありました。

協定期間の３年をどう考えるかというところで、現実を考えると３年という意見がありました。３年でいいということであれば、ご提案いただいたとおりでいいかと考えます。
集落の３年先、５年先を考えることに意義があるのであって、協定期間の年数については、柔軟に考える必要があると思います。

高齢化は待ってくれない。１５年経過し、担い手が高齢化している現実をしっかり踏まえて意見のとりまとめをお願いしたい。

最終評価について、皆さんのご意見を踏まえ、検討が必要であると判断されますので、事務局のほうで修正、追加をお願いします。修正等の内容の確認については、委員長の私に一任頂く事でよろしいでしょうか？

（各委員）異議ありません。

（委員長）修正内容については、私（委員長）の方で調整させていただき、結果を事務局から各委員へ送付させていただきます。